

長江下流低濕地における水生植物利用の變遷史

大 川 裕 子

はじめに

一、水生植物の分類

二、利用の變化

三、栽培化の背景

おわりに

はじめに

557

長江下流の平野部には低濕な環境が広がっている。季節的に大きく偏る降水量、山地から流下する河川の増水、潮汐の遡上、太湖周邊の排水不良の問題等、ここでは歴史上、過剰な水と如何に向き合うのかが大きな課題となってきた。本稿は、低濕地に生育する水生植物に焦點を當て、長江下流開發史のあらたな側面を探ろうとするものである。ハス・ヒシ・オニバスなどの水生植物は、新石器時代より水邊に暮らす人々の生活に深く關わり、食糧として活用されてきた。同じく低濕環境に生育する稻は、栽培化が進み主要穀物として社會的に大きな意味を有するが、その他の水生植物に注意が向けられることはこれまでほとんどなかった。しかし、農書・本草書・地方志をはじめとする多くの史料に残される關聯記載

を見ると、水生植物が長江下流において重要な役割を果たしてきた植物であることが明らかになる。以下、その利用・栽培技術の變化を通史的に追うことで、長江開發史の水邊からの検討を試みたい。

一、水生植物の分類

(1) 南方水邊の環境

水生植物とは水中や水邊に生ずる植物のことで、生存環境の特徴に應じて沈水植物・浮水植物・浮葉植物・抽水植物に區分して論じられる⁽¹⁾。浮葉植物のヒシ・ハス・オニバスは比較的水深の浅い池沼に、抽水植物のマコモは水に浸る所に、さらにアシの群落は水際に、というように植物には各々の生育に適した水邊環境が存在する。長江下流低濕地の原風景とは、一面に廣がる湖や沼澤地に、これらの水生植物が繁茂する状態であった。そして、この地域の開發の重要な側面の一つは、このような低濕環境に人為的な改造を加え、居住環境や農耕にとって適した環境を整えることであった。従來の長江下流域を對象とした開發史を振り返るとき、農業史の側面においては、主要穀物である稻の品種分化や栽培技術に焦點をあてた研究成果が蓄積されてきた。また、稻と共にこの地を支えた蠶桑業、明代以降に成長する春作物、棉花等の經濟作物についても主要研究テーマとしてとりあげられた。水利事業については、開發據點を水害から守り水上交通を促進し、安定した稻作生産を營むために低濕環境⁽²⁾がどのように克服されてきたのかが重要な研究課題となった。

水邊の側から開發の推移を考察する試みも行われている。北田英人は主として唐詩に詠まれる動植物に關する描寫を材料として太湖周邊の水邊の環境を復元し、唐代において環境が變化していく過程について検討を行った⁽³⁾。そして、唐代を自然環境と開發が共存・對峙していた最後の時代と位置づけた⁽²⁾。また周晴は唐代以降の湖州に焦點をあて、沼澤地が變化していく過程を植生・農業の面から論じた⁽³⁾。北田英人や周晴の研究手法は、人間と自然環境との關わりを探求する學問的

方向性、いわゆる環境史の視点を導入することにより生み出された成果である。

近年の考古學の分析成果からも、新石器時代の長江下流の人々と水邊の資源との関係が注目されている。浙江省餘姚市・田螺山遺跡は沖積地の低濕地に形成された河姆渡文化期の集落遺跡（前五〇〇〇～前三五〇〇）であるが、花粉や植物遺存體の分析を通して當時の集落の立地環境や、人々の食生活の一端が明らかにされている。田螺山人の生活は水邊の環境に高度に適應したものであった。⁽⁴⁾ 集落の外側にはアシや野生イネが繁茂する濕原が、その先にはヒシやオニバスが葉を廣げる浅い沼澤が廣がっており、集落を圍む小高い山々は照葉樹の森に覆われていた。田螺山の人々が食用していたデンブシ質のうち、初期において大きな割合を占めるのは堅果類（シイの實）とヒシであり、ついでオニバス・イネであったが、後期になるとイネが中心へと轉じ、他の植物は貯藏用の役割を擔うようになった。⁽⁵⁾ 稲作栽培の初期段階にあって長江下流の人々の食糧がヒシ・オニバスなどの水邊の資源に大きく依據していた點は注目すべきである。このような水生植物を組み込んだ食糧戦略は、時代が下り、漢代に至っても行われていたことが推測される。司馬遷は『史記』卷一二九、貨殖列傳において、「楚越の地、地廣く人希れ、稻を飯にし魚を羹にす。或いは火耕して水耨す。果隋贏蛤、賈を待たずして足る。地孰は食に饒く、飢饉の患無し」と述べている。貨殖列傳のこの箇所は「火耕水耨」の農業技術をめぐる議論の中で度々とりあげられるが、本来、司馬遷が言わんとしたのは、魚やイネを食べ、「火耕水耨」などの粗放な稲作も行いつつも、豊富な自然資源を利用することができる南方特有の生業の姿であった。⁽⁶⁾ このような低濕環境から得られる資源の積極的な活用は、或いは「環境適應」とも言い換えることができるかもしれないが、長江下流地域においては形を變えつつ、後世にも繼承されたと考えられる。本稿では以下に、低濕地の資源のなかでも水生植物を通して、人間と低濕環境との關係を検討していきたい。

(2) 農書における分類

前近代において、実際にどれ程の水生植物が把握されていたのだろうか。試みに、各々本草書、農書の集大成として知られる『本草綱目』、『農政全書』および、本草のみならず植物全般を対象とする『植物名實圖考』から、水生の植物や、水邊に關聯する項目をとりあげて以下に示した。

明・李時珍『本草綱目』 果類（五種） 隰草類（一二六種） 水草類（二三種）

明・徐光啓『農政全書』 樹藝・蕨部（六種） 蔬部（二種） 種植・雜種（五種）

清・吳其濬『植物名實圖考』 果類（六種） 隰草類（二八七種） 水草類（三七種）

各書は異なるジャンルに屬する書物であり、植物を収録する目的や分類の方法は異なっている。植物の藥效に重きを置く『本草綱目』『植物名實圖考』には、當然、野生植物も多く含まれている。兩書は果類としてハス・ヒシ・オニバス・クワイ・オオクログワイの五種類⁷の水生植物を収録する他、草類の中に「隰草」「水草」の項目を設け、多くの植物を収録する。しかし、この隰草類は濕氣を好む植物という程度の意味しかもたず、蘆・燈心草・水蓼・水甘草などの一部の植物を除いて、ほとんどが現在では水生植物として括られる範疇には屬していない。また、水草類には抽水植物のガマ・マコモ、浮葉植物のジュンサイの他、昆布・紫菜・海帶などの海草類も含まれる。水邊には様々な植物が存在し、人間はそれらを食用・薬用・燃料・建築材料・肥料等様々な用途に利用してきたが、本稿ではとくに食用として人間生活と深く關わる水生植物に限定してとりあげることとする。このような水生植物は、農書に栽培作物として収録されるものであり、現代の中國で「水生蔬菜」と呼ばれるものに相當する。⁸ 以下に、農書がとりあげてきた水生植物の種類・内容・分類の變化を概観することにした。

『齊民要術』卷六、養魚には「種蕒・藕・蓮子・茨・芰附」としてジュンサイ（蕒）・レンコン（藕）・ハスの實（蓮子）・

表一 『要術』各篇の附出

卷一	3 種穀	稗附出、稗爲粟類故
卷二	10 大小麥	瞿麥附
	14 種瓜	茄子附
卷三	18 蔓菁	菘・蘆菔附出
	19 種蒜	澤蒜附出
	28 種薄荷・芹・[艸虞]	莖・胡莖附出
卷四	33 種棗	諸法附出
	36 種梅杏	杏李麩附出
卷五	45 種桑、柘	養蠶附
	52 種紅藍花及梔子	燕支、香澤、面脂、手藥、紫粉、白粉附
	55 伐木	種地黃法附出
卷六	56 養牛・馬・驢・騾	相牛、馬及諸病方法
	57 養羊	氈及酥酪、乾酪法、收驢馬駒、羔、犢法、羊病諸方、並附
	61 養魚	種蓴、藕、蓮、芡、茭附

オニバス(芡)・ヒシ(菱)の栽培法が附記されている。養魚に關する内容は『陶朱公養魚經』⁹⁾からの引用である。また五種の水生植物の記載には、沈懷遠『南越志』、陸璣『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』、陶弘景『本草經集註』等、六朝で著された書物が多く引用される。この箇所が賈思勰自身による附記であるのか、別の人物の手によるものか詳細は不明であるが、養魚篇のように附(附出)を追加して記述する構成は、『要術』の他條にも複数存在する。¹⁰⁾卷一〜卷四に附出されているのは本篇に記載されていない作物の補足であり、卷五以降には概ね調理法や栽培(動物の飼育)から得られる副産物が加筆されている「表一」。ここでは、水生植物が養魚池における副産物として位置づけられている點に注目したい。後世の農書では、五種の水生植物のうち蓴の記載が削られるが、それ以外は『要術』の内容がほぼ踏襲されていく。しかし、分類方法には變化が生じている。唐宋期の農書には『四時纂要』『分門瑣碎錄』があるが、前者は月令式、後者は逸書であるため情報が限定的で、比較検討の材料にはならない。そのため、分類方法の變化を探るためには、元代の總合農書の出現まで待たなければならぬ。

そこで、『農桑輯要』『王禎農書』の分類・記載を見てみると、『輯要』は蓮・藕・菱・芡を養魚から切り離し、内容は『要術』の記載をほぼ踏襲して卷六・藥草に収録している「表二」。一方、『王禎』は、『輯

表二 農書が収録する水生作物

書名	品目	養魚	蓴	蓮	藕	芡	菱	茨菰	鳧茨烏芋	茭白
『齊民要術』(北魏)		養魚						-	△	△(菰實)
『四時纂要』(唐)	四月	-		正月	△	-	-	△	-	
『分門瑣碎錄』(南宋)	蟲魚	-		種花	-	-	-	-	雜説(菱首)	
『農桑輯要』(元)	禽魚	-	藥草				-	-	-	
『王禎農書』(元)	農桑通訣 蓄養	-	百穀譜・菰				-	-	-	
『居家必用事類全集』(元)	養魚	-	果木類・種水物法				-	-	-	
『農桑衣食輯要』(元)	-	-	三月	八月	三月	-	-	三月		
『便民圖纂』(明)	牧養類	-	樹藝類・種諸果花木						種諸色蔬菜	
『農政全書』(明)	收養	種植雜種	樹藝・菰						荒政・草部	
『授時通考』(明)	農餘・牧畜	農餘・蔬	農餘・果						-	

* 養魚、水生植物の記載を収める編名を記した。△は名稱のみで、栽培記載がないもの。

要』において藥草に分類された四種の水生植物を、百穀譜集三・菰屬に収録した上で、とくに芡・菱については「雞頭、粉と作し、之を食らえば甚だ妙なり。河北の漕澤に沿う居人之を採り、春きて皮を去り、搗きて粉と爲し、蒸燥して餅を作り、以て糧に代ふべし(*「河北」)以下は『本草衍義』からの引用)」「江淮及び山東は其の實を曝し、以て米と爲し、以て糧に當つべし。猶ほ橡を以て資と爲すがごときなり」と、食糧としての重要性を加筆・強調している。水生植物の種類については、南宋『分門瑣碎錄』に茭白(マコモダケ)が、明代以降はクワイ(茨菰・慈姑、オオクログワイ(鳧茨・烏芋)の記載が新たに加わる「表二」。以上から、農書でとりあげられる水生植物は後世、獨立した栽培品目として確立し種類も増加すること、その變化は南宋より元代にはすでに起こっていたという、およその流れをつかむことができる。

しかし、水生植物の栽培地域について農書をもとに栽培地を限定したり、分布の地域性を見いだすことには限界がある。そこで『要術』以降の水生植物の記載内容が、本稿で考察対象とする長江下流域の状況を考える際に妥當かどうかを見極めるために、宋より明代の地方志の物産を参照した「表三」。すると、長江下流の平原部に位置する府志には『要術』以来の水生作物が物産・土産として列擧されていることが明らかとなる。例えば、明・正徳『姑蘇志』卷一四、土産は「水實之屬」に菱・芡實・藕・蒻臍・

表三

	蓴	蓮實	藕(蓮)	芡	菱	茨姑	芡・荻・荇	菱白(菰)	水芹	水芋	出典
宋元	○	—	○	—	○	—	—	—	—	—	紹興『吳郡志』30、土産
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—	嘉泰『吳興志』20、風俗
	○	○	○	○	○	—	—	○	○	—	嘉泰『會稽志』17、草部
	—	—	○	○	○	○	○	○	—	—	嘉定『赤城志』36、土産
	—	○	○	○	○	—	—	○	○	—	景定『建康志』42、土産
	—	○	○	○	○	—	—	○	○	—	咸淳『臨安志』58、物産
	—	—	○	○	○	○	○	○	—	—	至元『嘉禾志』6、物産
	—	○	○	○	○	○	○	○	—	—	至順『鎮江志』4、土産
明	○	—	○	○	○	○	○	○	○	—	正徳『姑蘇志』14、土産
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—	正徳『松江府志』5、土産
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—	嘉靖『寧波府志』12、物産
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	萬曆『杭州府志』32、土産
	—	○	—	○	○	○	○	○	○	—	萬曆『常州府志』10、物産
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—	萬曆『嘉興府志』1、土産
	○	○	—	○	○	—	○	○	○	○	萬曆『紹興府志』3、物産

茨姑の五種類を、「溪茰之屬」に蓴菜・菱白(菰)・荇菜・芹を記載する。また萬曆『杭州府志』卷三二、土産は「蔬(蔬)之屬」を園蔬・澤蔬・野蔬に三大別し、澤蔬には水芋・菱白・芹・荇・蓴をあげる。また同様に「果之屬」のうち澤果として菱・菱・芡・藕・蓮房・苳菰・荇菜をあげる。このように、明代になると、地方志には水生植物が水實・溪茰・澤蔬・澤果などの名稱にまとめられて分類・記載されるようになるのである。宋(明代の地方志の記載からは、水生植物の栽培化が長江下流においてかなり進み、明代には地域の物産として重要な役割を果たすまでになっていたことが窺われる。本稿では、以下に『要術』養魚が附出するジュンサイ・ハス(實と莖)・オニバス・ヒシに、卷九の調理法で登場するマコモ(實と莖)、そして後世の農書に栽培の記述が加わるクワイ・オオクログワイ・水芋等を加え、その利用變化を辿ることにしたい。

二. 利用の變化

(1) 唐末五代以前

唐代以前の長江下流に關する史料は少なく情報は限定的だが、湖沼に自生する水生植物の利用を窺わせる記載が散見する。『西京雜記』卷五『漢魏叢書』所收には前漢・會稽郡において、マコモを日々食用する母子の逸話が収録されている。會稽の人顧翽、少くして父を失ひ、母に事へて至孝なり。母好みて雕胡飯まほめしを食し、常に子女を帥いて躬ら採擷す。家に還りて、水を導き川を鑿ち、自ら種えて供養し、毎に盈儲有り。家は亦た太湖に近く、湖中、後に自ら雕胡を生じ、復た餘草なく、蟲・鳥の敢て至らず。遂に以つて養を爲すを得。郡縣其の閭舎を表す。

マコモ (*Zizania latifolia*) はイネ科の抽水植物で、水深一メートル以下の淺瀬に生育する。その生育環境はヨシのそれに近く、史料上にも「茭葦」の語が頻出する。その實は古くから穀物の一つとして食用され、史料上には菰飯・菰米・雕菰飯と記される。『周禮』天官・食醫には「魚は菰に宜し」とあり、水邊と關わりのある魚とマコモが一緒に食されていたことを窺わせる。また同、天官・膳夫の鄭玄注に引く鄭司農說では菰は六穀、天官・太宰の鄭玄注では九穀の一つに數えられている。『西京雜記』では、湖の淺瀬や、水邊に自生するマコモを採取し、或いは川水を引き込んで半栽培化して日常的な食糧としている様子が記されている。『齊民要術』¹¹⁾には、マコモの栽培法は一切觸れられていないが、卷九、飧飯第八六・菰米飯法には菰飯の調理・保存法に關する記述がある。以上のことから分かるのは、マコモは食用とされるが積極的な栽培は行われていない、つまり野生のものを採取して利用されていたという點である。マコモには脱粒性があり、穂を撒いて増やすことが難しい。そのため、現在でも莖を含む土壤を切り取り移植する株植えが中心である。イネの栽培化が脱粒性の克服とともに進んだことを考えれば、マコモは品種改良がほとんど行われなかったことになる。¹²⁾『要術』以

降も農書にはマコモの實の栽培法が記載されない理由はここにある。

この時期の野生水生植物の利用例はマコモだけではない。『南齊書』卷五五、孝義には、野生のヒシ（菱）やジュンサイ（蓴）を採取して販賣する姉妹の話が収録されている。

又た會稽の人・陳氏に三女有りて男無し。祖父母、年八、九十、老耄にして知る所なく、父は癡病に篤しくみ、母は其の室を安ぜず。歲饑に値り、三女相率ひて西湖に於いて菱・蓴を採り、更日市に至りて貨賣し、未だ嘗て虧怠せず。

ヒシ (*Trapa* sp.) とジュンサイ (*Brasenia schreberi*) はともに、根が水底に固着し葉が水面に浮く浮葉植物だが、環境はヒシが一〜三メートルの水深を要する一年草であるのに對して、ジュンサイはそれよりも浅い水域に生育する多年草である。ヒシはデンプン質に富む實を食用し、ジュンサイは葉を食用とする。ヒシについては、後述する唐代以降の史料に品種や栽培法の變化を確認することができるが、ジュンサイの記載は後世の農書に記されず、明代にいたるまで栽培記述もほとんど確認することができない。ところが『齊民要術』養魚には、ジュンサイの栽培について以下の記載を確認できる〔表2〕。

種蓴の法、陂湖に近き者湖中に於いて之を種うべし。流水に近き者水を決して池と爲し之を種うべし。深淺を以て候と爲す。水深ければ則ち莖肥ゆるも葉少く、水淺ければ則ち葉多きも莖瘦す。蓴は性は生おい易く、一たび種うれば永とこしえに得。淨潔に宜しく、汚に耐えず、糞穢池に入れば即たちに死す。一斗餘許を種うれば、以て用に供するに足るなり（『齊民要術』養魚）。

『要術』の記載によれば、ジュンサイは適度な水深と清淨な水質が保たれば容易に栽培することができた。後世の農書にジュンサイの栽培法が記されないのは、マコモと同様、利用はされるが積極的に栽培される植物ではなかったからであろう。しかも、マコモのようにデンプンを得る穀（糧）ではないジュンサイは、そもそも食糧としての依存度も低かったと思われる。また保存が難しいため、利用は南方に限定される局地的な植物であったと考えられる。それにも拘わらず

『要術』に栽培法が収録されるのは、南方を象徴する食材として當時の人々がジュンサイに對して高い關心をもっていたからである。『世説新語』言語には、西晉の陸機が訪問先のもてなしに羊酪を供された際、故郷の吳の蓴羹と比較し、蓴羹がいかに美味であるかを述べた著名な逸話が記録される。¹³ ジュンサイはこの逸話が廣まった後、とく南北分裂期において南方の香りを持つ食材・食物として文學作品に登場することになった。

以上、六朝期までの史料には、野生の水生植物を採取し日々の糧としたり、賣買して生計を支える人々の姿が記録されていた。これらの史料には、饑饉や生活苦という前提がつきまとい、この例だけを以て野生水生植物の日常的利用が一般的であったと斷言することはできない。しかし、六朝期の長江下流域においては、一般農民が共同利用的に手つかずの沼澤地の利益を享受し、それが日常生活に大きな役割を擔っていたと考えられるのである。¹⁴ 唐代以前には野生の水生植物が廣範に自生する未開發の水邊の環境が存在し、野生植物を活用する人々が廣範に存在したことが推測できる。

唐代になると、長江下流域に關わる史料が相對的に増加し、とくに唐詩の中にその情景や水生植物を描寫した作品が多く見られる。なかでも「菰飯・菰米（＝マコモ飯）」は廣く南方を象徴する語として多くの詩人にとりあげられた。長江上流の事例ではあるが、夔州・東屯の稻作について描寫した杜甫「行官張望、補稻畦水、歸」には、「秋の菰は黒米と成り、精鑿すれば白き粲かがやきを傳えん、玉粒は晨に炊くに足り、紅鮮は霞のごとく散るに任せん」とする句が見える。古川末喜は詩中の「紅鮮任霞散」について、精白した菰飯に紅鮮（赤玄米）を混ぜて炊いている可能性を指摘し、マコモ飯がしばしば唐人の食卓に上っていたとする。¹⁵ このほか、採菱（ヒシの收穫）、菱香（ヒシを炊く香）、採蓮・採藕（ハス・レンコンの收穫）、蓴羹なども、江南の情緒として多く詠まれた。詩が實態をどの程度反映しているのかは明らかではないが、唐代には水生植物の固有品種、例えばヒシの場合は、折腰菱と呼ばれる優良品種が現れるようになる。ヒシ・ハスの收穫情景が詩中に頻出するのも、湖面での栽培化が進みつつあったことを示すものであろう。¹⁶ 唐代におけるかかる動きの結果が、次の宋代以降の水生植物の利用の大きな變化へと結びつくのである。

宋代以降は地方志や本草書の編纂・出版が前代に比べて増えたために、長江下流域の水生植物に關する多くの情報を得ることが可能である。それらの史料から、水生植物の品種が増加し、栽培法が多様化していく状況を確認することができる。北田英人は白菜・油菜・橘を例に、宋元時代には育種の意識性が増大し、品種の多様化が明瞭に窺えるようになる¹⁷と述べ、その背景には商品流通の擴大や所得増大等の諸條件が寄與したと指摘する。このような作物改良の動きはヒシのよ¹⁷うな水生植物の場合にも確認することができる。

折腰菱、唐甚だ之を貴ぶ。今、腰菱と名づくるに野菱・家菱の二種有り。近世復た餛飩菱を出す、最も甘香にして、腰菱廢る（范成大『吳郡志』卷三十、土物下）。

『吳郡志』では、ヒシを野菱（湖などに自生するもの）と家菱（栽培されるもの）に明確に區分している。さらには、唐代の折腰菱にまさる優良品種・餛飩菱の存在について記載する。この餛飩菱については嘉泰『吳興志』卷二十、物産にも記載があり、「秋晚に實を採り、竹箔にて曝乾し殻を去りて米と爲し亦た果と爲す。收むること十數斛に至る者有り」と、多くの收穫を得る者がいたと述べる。十數斛に及ぶ收穫を得るためには、それなりの面積で栽培されていることが豫測できる。このような品種の多様化は、栽培が定着し、より良い種類を求めたいという人々の意識の高まりがこの時期に生じていたことを意味する。背景には都市の發達や富裕層の出現、流通の發展等の社會變化が存在するのである。

多種多様な副菜や零食を求める動きは、マコモの利用にも變化をもたらした。マコモは紀元前より穀類として實が利用されてきたが、宋代になると莖（マコモダケ）が廣く利用されて栽培が進んだと考えられる。マコモダケはマコモに黒穂菌を寄生させて、若莖を筍のように肥大化させて食用に供するものである。陶弘景『名醫別錄』下品には「孤根」の呼稱が見えることから、唐代以前にはすでにマコモの實以外の部分が食用されていたことが分かる。しかし、唐〜宋期の本草

書には春季の若芽と秋季の肥大莖とが混亂して記載されている。⁽¹⁸⁾ その中で、最も要を得て兩者を書き分けるのが、北宋・蘇頌である。

菰根、舊^かて出す所の州土を著さず、今江湖陂澤の中に皆な之れ有り。即ち江南の人呼びて菱草と爲す者なり。水中に生じ、葉は蒲・葦の輩の如し。刈りて以て馬を秣^かえば甚だ肥ゆ。春に亦た笋を生じ、甜美にして啖うに堪う、即ち菰菜なり。又た之を茭白と謂う。其の歳久しき者、中心に白臺を生じ小兒の臂の如し、之を菰手と謂う（『本草圖經』草部下品之下、卷九）。

マコモ栽培に關しては、南宋・溫革『分門瑣碎錄』にある「菱首、根は逐年移し動かせば、生ぜし者黒まず」とする記述が初出であり、元『農桑衣食撮要』卷上には、三月に「菱筍は」止だ水邊に於いて深く之を栽う」と記される。より具體的な栽培法となると、明『宋氏樹畜部』三にまで時代が下る。

菰、即ち菱なり。「其の臺には四季種有り。今、茭白と曰う。『瑣碎錄』に云う、小兒の臂の如く、味わい甘く嫩^{やわ}かなり」。⁽²⁰⁾ 二月より五月に至り、漸^{ようや}く其の種を取り、淺水の田或いは河塘の沃土の中に種え、臺を生ずれば則ち剖きて之を取る。其の烏鬱は用うるに堪えず。種時・採時は鐵器を犯すこと無かれ。之を犯せば臺を生ぜざるなり。

後述するように、北宋・南宋期における湖の占據者たちは、淺瀬で菱（葍）・菱・荷などを栽培している。マコモは實の利用においては栽培化が進まなかつたため、栽培された菱というのは、マコモダケのことであろう。

つぎに、ハスの栽培についても變化を見いだすことができる。ほとんどの農書はハス（實と根）の栽培について、『要術』の記載を引用し、『分門瑣碎錄』も例外ではない。しかし、注目すべきはハス栽培の記載が「種藝・種花」に列せられている点である。『瑣碎錄』は『要術』の藕・蓮子の記載を引用した後、「蓮の莖^みを以て甃甃の中に投じ、年を経て移種すれば、碧き花を發^{ひら}く」と花の色を變える方法についても記載する。この青い蓮花の記載は、北宋・孫光憲『北夢瑣言』卷十、杜孺休種青蓮花にすで見え、そこでは湖州の染戸が蓮實を甃甃の底に浸しておき、家池で青い蓮花を咲かせる逸

話となつてゐる。⁽²¹⁾『要術』は序文において、「花草の流、以て目を悦ばすべきも、徒に春花あるのみにして、秋の實り無し」と述べ、花卉は扱ふ價值はないとする態度を示した。そのため、ハスについても記載の對象となつたのは食用可能な實と根の栽培法であつた。唐代以降盛んになる花卉の栽培は、宋代にはより一般にまで普及していく。園林の造營、花卉専門業者の登場、關聯書物の執筆など、花そのものに價值を見いだす社會の動きが、ハスに對する意識の變化を生じさせたのである。⁽²²⁾

以上のように、宋代において品種が増加し栽培化が進展するのは、水生植物が自家消費に止まらず、商品としても栽培されるようになったことと關係すると思われる。水生植物の賣買に關する記載は、史料にも確認することができる。陸游は『入蜀記』卷三の中で、長江を船で遡り安徽省蕪湖にある天門山附近にさしかつた際の光景として、「水滸の小兒、菱茨蓮藕を賣る者甚だ衆し」と記している。農村の子供達が旅人相手に賣つてゐるのは、自給の餘剩程度であつたかも知れない。一方、杭州や蘇州などの大都市近郊では、都市の人々の副菜品への需要に應えるべく蔬菜栽培が發達した。⁽²³⁾南宋・吳自牧『夢梁錄』卷一八、民俗は杭州近郊で產出される水生植物について、「蓮、湖中に生ずる者は綉蓮と名づく。尤も佳し」、「藕、西湖下湖、仁和護安村・舊名范堰に扁眼なる者を產す。味佳し」、「菱、初めて生ずる嫩なる者は沙角と名づく、硬き者は餛飩と名づく。湖中に栗子様の如きもの有り、古塘大紅菱なり」、「オニバス雞頭、錢塘梁渚、窰頭、仁和藕湖、臨平湖俱に產す。獨り西湖に生ずる者は佳きも、却て產多からず、ザル篩もて粉と爲すべし」と水生植物の情報を記載する。都市部に暮らす消費者たちが近郊で生産される商品の良し悪しについて、把握してゐたと理解することが可能であろう。以上のような都市の需要を受けて、大規模に水生植物を栽培する者が出現したことも、史料からは確認することができる。その動きは、とくに南宋期に顯著となる。嘉泰『會稽志』は紹興府山陰縣梅市のオニバス栽培について以下のように記している。

今、山陰梅市の雞頭、最も盛んなり。一户の種うること十八里に及ぶ者有り。然るに亦た數等有り。小白皮は最も佳

し、大白皮・中白皮は其の皮頗る堅く齧み難し。黄嫩は又た太だ軟く、皆な速ばざるなり。其の柄も又た狙を爲すべし、甚だ美し（嘉泰『會稽志』卷一七、草部）。

山陰梅市では一戸で一八里にも及ぶオニバス栽培を手がける者がいたのである。そこで栽培されるオニバスは、種類も豊富であった。このような栽培の擴大は、新たな問題を引き起こすこととなった。水生植物の繁茂により湖水面が減少し、灌漑・水運・飲料水の不足を招いたのである。史料には、水草の除去や種植を禁じる記載が多く見られるようになる。このような問題は、南宋期において東錢湖や西湖などの天然の湖で発生していた。まず、鄞縣の東錢湖については、『宋會要輯稿』食貨八、水利下に南宋・乾道五年（一一六九）における張津の言として「昨に豪民、湖塘の淺岸に於いて、漸次に包占し、菱荷を種植するに因りて、湖水を障塞す」とあり、豪民による湖面の占據が原因で、湖が淤塞されつつあると指摘されている。その弊害は、東錢湖を灌漑水源とする耕地にも及んだ。

鄞・定海七郷の田、其の灌漑に資するも、菱葑蘆蒲荷茨滋蔓し除かざれば、湖輒ち埋まる。淳熙四年、皇子魏王州に鎮し、朝に請いて大いに之を浚う（寶慶『四明志』卷一一）。

同様の事態は臨安の西湖でも発生していた。乾道五年の周淙の上奏には以下のようにある。

有力の家、又復た湖面を請佃し、轉じて人戸をして租賃し、菱菱を栽種せしむ。包占に因縁で、隄岸を増疊し、日益々填塞す。深慮するに、歳久しくして西湖愈よ狭く、水源通ぜざらん（咸淳『臨安志』卷三二、山川・西湖）。

東錢湖や西湖において、豪民が湖面を占據して水生植物の栽培を行っているのは、ハス・ヒシ・マコモなどに商品価値があり栽培に伴ったからである。廣範圍に存在した湖沼は、宋代を通じて灌漑・水運・飲料水・魚鳥の棲息・水草繁茂・田地等々、多方面において活用されるようになっていた。南宋期に大土地所有の矛先が湖水面にも向かうようになると、各々の利益が抵觸し摩擦が発生するようになっていた。水草繁茂の問題は、宋代の長江下流域における人口急増、都市の發展、都市民の嗜好變化による水生植物への需要によって引き起こされた社會的問題なのである。

明代になると、地域に密着した農業技術を記した農書が多く出現するようになる。『便民圖纂』は蘇州府吳縣の知縣・鄭璠により弘治一五年（一五〇二）に刊刻されたもので、農業技術の知識の他に醫藥の民間處方や占卜等をも内包する民間日用類書の形式を備えた一書である。編纂者を鄭璠とすることに異論もあるが、その記載内容、⁽²⁶⁾少なくとも農業の部分に關しては技術や栽培品目、道具・作業の呼稱について蘇州や松江等の太湖東岸地區の特徴を反映していると考ええてよいであろう。この『便民圖纂』卷四、樹藝類上・種諸果花木にはレンコン・ヒシ・オニバス・クワイ・オオクログワイ等の水生植物の記載があり、前時代とは異なる栽培法を確認することができる（従來の農書に見られなかった記載は破線で示した）。

(a) 藕、二月の間、帶泥の小藕を取りて、池塘・淺水中に種う。深水に宜しからず。茂盛するを待ちて、深くするも亦た妨げず。或いは糞或いは豆餅にて之を壅^{さか}せば則ち盛る。

(b) 菱、重陽の後、老菱角を收め、籃を用つて盛り河水の内に浸し、二、三月に發芽するを待つ。水の深淺に隨い、約三、四尺許に長ず。竹一根を用つて、火通口様に削作し、老菱を箝^{はさ}住み、水底に挿入す。若し糞を澆ぐときは、大竹を用つて節を打通して之に注ぐ。

(c) 鶏頭、一に茨實と名づく。秋間熟する時、老子を收取し、蒲包を以て之を包み、水中に浸す。三月の間に、淺水内に撒き、葉の水面に浮くを待ちて、深水に移栽す。科ごとに五尺許離す。先ず麻餅或いは豆餅を以て河泥に拌勻し、種時、蘆を以て根處に挿記す。十餘日の後、科ごとに河泥三、四碗を用つて之を壅す。

(d) 芋^{オオクログワイ}、正月に種を留む。種は大にして正なる者を取る。芽の生ずるを待ち、泥缸内に埋む。二、三月の間、復た水田中に移す。茂盛するに至りて、小暑の前に於いて分種す。科ごとに五尺許離す。冬至の前後に之を起す。耘・揚は種稻と同じくす。豆餅或いは糞もて皆な之を塞ぐべし。

(e) 茨菰クワイ、臘月の間、嫩芽を折取し、水田に挿す。來年四、五月、插秧法の如く之を種う。科ごとに尺四、五許離す。田は最も肥ゆるに宜し。

吳縣一帯では水生植物の栽培がとりわけ盛んであった。『便民圖纂』では、苗の移植、糞肥や餅(油粕)の施肥、耘(手による除草)、塲(農具による除草中耕)等、勞力と經費を投入する栽培が行われている。それまでの農書が引用してきた『要術』の栽培法は、例えばヒシヤオニバスであれば「……取子、散着池中、自生也」とあるように、取り置いた種子を池に撒布するだけの至って簡単なものであった。『便民圖纂』の記述を見ると、一六世紀初頭の蘇州では集約的な水生植物の栽培が展開されたことを窺わせる。オモダカ科のクワイとカヤツリグサ科のオオクログワイは湿地に自生するものや、水田の雑草として生じるものを人々が採取し食用としてきた長い歴史をもつが、明代以降、栽培に關する記述を確認できるようになる「表一」。李時珍『本草綱目』卷三三、果部は、クワイについて「慈姑、淺水中に生じ、人も亦た之を種う」と述べる。またオオクログワイについては、野生と栽培の別について述べた上で、「吳人は沃田を以て之を種う」と述べている。前述の『便民圖纂』の栽培法を見ても、水田において稻と同様の方法が用いられており、かなり力を入れて栽培されていたのだろう。

クワイ・オオクログワイ同様に、明代に入り栽培が展開する水生植物に水芋がある。芋(サトイモ)は古くから民間で食用されてきた蔬菜の一つであるが、史料上、明代後半の長江下流では旱芋(畑で栽培されるもの)と水芋(湿地帯や水田で栽培されるもの)に二分類する動きを確認できる。平野部ではとくに水芋が栽培された。松江府華亭縣の宋詡が弘治甲子(二五〇四年)に記した『宋氏樹畜部』には水芋の栽培法が記され、それによれば「候成れば則ち水田に移蒔す。芝麻芋等を用いて之を膏す」と、芽出しさせておいた水芋を水田に移植し、ゴマの油粕を下している。また清『廣羣芳譜』卷一六、蔬譜には、一畝に二一六〇株を栽培するという記述もあり、間作や混作ではない水田一面での水芋栽培が行われている。張履祥『補農書』には明末〜清初における湖州・嘉興府一帯の農業の實際が記されるが、一三段には以下のように記され

ている。

種芋……種うること地溝に在れば則ち肥を省く、但だ早歳は能く長せず、又た糟生じ易し。湖州俱な地上に種うれば、名づけて旱芋と爲す、郷低なるが爲の故なり。今半ば地に在り、半ば田に在り。先ず地より食し、後に田を食するを以てせば、秋・冬均しく置乏せず。旱芋、種は廣徳に出づ。清明の時、彼處より湖に排賣す。水芋の若きは、斷じて地上に種うべからず。上、芋苴を種う一則（『補農書』一二三段）。

ここで張履祥が述べるのは、湖州で栽培されるサトイモの種類の變化である。かつて湖州ではサトイモといえば、畑に植える旱芋しかなかったが、今では水田でも水芋を栽培するようになった、ということであろう。⁽²⁸⁾ 收穫時期の違ふ旱芋と水芋を組み合わせれば「均しく置乏せず」と述べていることから、自家消費用に栽培されていたかもしれない。地溝（＝耕地の排水溝）での栽培にも言及されている。

六朝以降、記載が減少したジュンサイについては、古から華亭縣が産地として知られていたが、宋代になると湘湖での栽培が盛んな様子が記録されるようになる。⁽²⁹⁾ さらに明・袁宏道『湘湖記』には、以下のようにある。

蕭山の櫻桃・鷺鳥・蓴菜は皆な名を知るも、而るに蓴は尤も美し。蓴、西湖より採りて、湘湖に浸すこと一宿なれば、然る後に佳し。若し他湖に浸せば、便ち味無し。浸處も亦た多地無く、方圓僅かに數十丈許を得。

明・陳繼儒『偃曝談餘』は「吾が郷（松江府華亭縣）の泖湖・金澤寺の旁に蓴多し、鑑孟熙云う、永興・湘湖の蓴菜は、三月に盡く采りて賣り、秋に至れば則ち人の采る無し」と述べ、湘湖のジュンサイ栽培が完全に商業目的であったと明記する。湘湖産のジュンサイは、ブランドとしての地位が確立されていた。

以上、明代には水生植物の商品化の動きが顯著になり、集約的な栽培が展開するようになったこと、また、新たにクワイ・オオクログワイ・水芋などが水田や浅水域で積極的に栽培されるようになったことを確認した。

三、栽培化の背景

ここまで水生植物が栽培化される過程、栽培技術の變化などを通史的に概観した。つぎに、水生植物の栽培化が促された要因を水利開發と食利用の側面から検討する。

(1) 水利開發の側面

長江下流平原部の水利開發の展開については、陳橋驛、斯波義信が開發空間の推移を通史的に論じている。それを簡潔にまとめるならば、水利技術が未熟な時代、開發の據點は灌排水の安定した山間の盆地・河谷平原に置かれていたが、技術の發展とともに山麓部の扇狀地へ移り、最終的には臨海のデルタ氾濫原（或いは太湖沿岸の濕地帯）へと段階的に推移したというものである。³⁰以下、兩氏の發展モデルに依據しつつ、長江下流域における水利開發の進展にともなう水邊の環境變化によつて、人々と水生植物との關わりによつてどのような變化が生じたのかを考えていきたい。まず、早期の水利開發は山麓に貯水湖を作り、山水の奔流が下流域に害を及ぼすのを回避するところから始まった。これらの貯水地は、灌漑にも利用された。このような機能をもつた初期の水利施設としては後漢時代の鑑湖や南湖、さらに六朝期の練湖・赤湖・廣徳湖などをあげることができ、これらの貯水湖もまた水生植物が繁茂する場となった。³¹以上の大型貯水湖の建設は、公權力（地方長官）の主導で行われたため、史料上には事業を賞賛する記録が残されることになる。しかし實際は、大規模な水利事業は開發據點形成を目的とした局地的なもので、長江下流平原部には天然の湖や沼澤が廣がり、ここでは季節に應じて水深が變化し、多くの水生植物が繁茂する環境が形成されていた。ジュンサイの自生に適した清水の淺瀬や、マコモが群叢する水際は至るところにあったはずである。前述のマコモを日常的に食べる會稽の顧翺母子のような人々の存在、或いはそのような行爲が孝として賞賛される背景には、手つかずの低濕環境があつた。

六朝期には低湿地を干拓し耕地化する湖田の造成計画が始まる。三國吳の時に丹楊の低湿地帯で試みられた甫里塘の建設などは莫大な経費を費やした上に、多くの死者を出し困難を極めたが、湖田は唐代までには一般的な存在形態となつていった。⁽³²⁾湖田形成により、低湿地へと人間が足を踏み入れる機会が益し、唐代には湖沼を利用した水生植物の栽培が進展することになった。唐末五代以降、低湿地の開発は新たな段階を迎える。圍田圩田建設による耕地化が進展する一方で、その対象とならなかつた湖沼や、耕地化が困難なほどの排水不良の窪地・低地において水生植物の栽培が廣く行われた。杭州や蘇州などの大都市近郊で栽培される水生植物は、都市住民の副業として商品化され、「澤果」「澤蔬」としての地位が確立するのである。⁽³³⁾

(2) 水生植物栽培の二つの側面

長江下流域における水生植物の栽培は、宋代に本格化し明代に至りより大規模に行われるが、このような栽培化の流れは二つの方向に展開する。一つは、湖水面や水田一面で水生植物を栽培し、勞力・経費をかけた「集約的な栽培」。もう一つは、水利事業から取り残された低湿地空間を有効利用する「間隙地での栽培」である。⁽³⁴⁾

まず、前者については、宋代に社會問題にもなつた豪民の湖水面占據による水生植物の栽培、南宋期の山陰縣において一戸が經營する一八里に及ぶオニバス栽培、湘湖のジュンサイ栽培、そして蘇州において水田一面に集約的に栽培されるクワイ・オオクログワイ、あるいは湖州の水芋栽培などをあげることができる。灌漑用水や飲料水の供給源となる湖や、稲作の栽培地としても十分有益な「沃田」において敢えて水生植物を栽培するのは、それに見合うだけの商品価値があったからである。これらの動きは、宋代以降にはじまり、明代に加速する長江下流の商業的農業と深く関わっている。

二點目の間隙地における栽培とは、ともすれば荒廢地として打ち捨てられがちな排水不良の低湿地空間を有効利用するための栽培である。宋代以降、塘路や圍田圩田の造營により低湿地での開發が本格化するが、その開發過程においては、地

形的要因により開發には適さなかつた湿地や、技術的限界により開發することが出来なかつた低地や窪地が出現する。そのような低湿空間の一つが「蕩」である。蕩は水はけの悪い窪地を指す語で、宋代以降の長江下流において新たに利用されるようになった。このような蕩は、往々にして水生植物の栽培や養魚、また牛や馬を放牧して茭草（マコモの葉）を食べさせる放牧地として活用された。南宋・楊萬里「過臨平蓮蕩四首」には季節的に出現する蕩の状況が以下のように描寫されている。

朝に來りて藕を採り夕に來りて漁す　水に菱荷を種え岸に蘆を種う

寒く浪落つる時分れて蕩を作り　新流漲りて後合さりて湖と成る

この詩は臨平の蓮蕩の景觀を詠んだものである。減水期に、最後まで水がひかない窪地、すなわち蕩と、そこで水生作物が栽培される状況が實に分かりやすく描寫されている。このような蕩は、長江下流各地に點在していた。例えば太湖東南の三泖地區は、太湖周邊で最も土地が低く、太湖から溢れた水が集積して大沼澤地を形成していた。宋代以降は、圍田開墾が進行するが、それにより分割された沼澤地には無数の蕩が分布することになった。⁽³⁶⁾ また、圩田の内部に存在する蕩もあつた。江寧府高淳縣の固城湖西岸の低地帯には、永豐圩（北宋期創建）や相國圩（傳・春秋期創建）が建設され耕地化が計られた。このうち、相國圩の中には鍋底蕩と呼ばれる、「形は鍋底の如く、其の中の田は皆な低潦」な窪地が存在している。⁽³⁶⁾ 相國圩や永豐圩のような巨大圩の内部が「すっぱ抜け」の不完全なもので、中に水生植物が育つ窪地が存在したことは一九七九年の江南デルタ・シンポジウムでも指摘されているが、鍋底蕩の記載は、乾田化を目指した水利事業の不完全さを物語るものである。このような「低潦の田」は各地に存在した。

明代に至ると、精緻に水路を開鑿しこのような排水不良の湿地を餘さず耕地化する分圩の動きが生じる。分圩をめぐる明代農村の社會の構造について網羅的な研究を行った濱島敦俊によれば、分圩とは圩田造營に適した未開の低湿地が明代中期になり減少・消滅することに伴い起こった土地の高度利用を目指した動きで、一五世紀中葉・蘇州に始まり一七世紀

前半・青浦において終了するという。⁽³⁸⁾ 上記した明代における水生植物栽培の進展時期は、ちょうど濱島の指摘する分圩活動が進行する時期に重なるのである。土地を有効利用しようとする人間の意識は、水邊の側にも向かったと考えることができる。分圩の終了から一世紀餘経た清・道光年間に蘇州府吳縣の奚誠により記された『耕心農話』では、地勢が低い場所にある水田を低田・澤田さらに河蕩に分け、各々を有効利用する方策が提案されている。

低田の早秈は隴背に種え、再まに隴土を以て之を培えば則ち日々漸よく壟は高まり、水旱に患うることもなかるべし。其の畝の晩稻を補種すべき者、則ち之を補種す、如し畝深く積水過多にして、晩稻を補種すること能わざる者、春に在りて水芋・慈姑を種え、夏に菱白・地栗の類を種う……又、至つて低き者、之を澤田と謂う。常に積水退かず。水産の屬、および席艸・灯草を種うべし。或いは深きこと河蕩の如き者、則ち菱茨蓮藕の諸品を種う。或いは魚を養蓄せる池となす。且つ田間に蓄洩せるの水渠と爲すべし。

上記は奚誠が「分行間種法」と名づける農法で、低田においては高く盛り上げた隴背（「うね」）に早秈を種え、また旁らの排水用の畝（「みぞ」）には、晩稻を補栽して土地を有効的に利用することが推奨されている。また、畝に水が溜まつて晩稻に適さない場合は、水芋・クワイ・マコモダケ・オオクログワイなどの水生植物を栽培することや、さらに排水不良の澤田や、水深が深い河蕩の場合は、各々に應じた植物を選んで栽培し、收穫を得るべきだと述べられる。奚誠が提唱するのは究極の低濕地利用法である。分行間種法は、あくまで奚誠による提言であり、このような農法がどこまで現実性を帯びていたのか定かではない。しかし、前述の『便民圖纂』に見たように、一六世紀の時點で蘇州では、集約的な栽培法が進展していた。水深に應じた水生植物の選擇と栽培については、清・道光年間の吳縣では行われていたと考えるのが妥當であろう。なお、ここでの畝は前述の『補農書』において（水）芋栽培が指摘される「地溝」に相當する。

明代に蕩や低田・澤田などの排水不良の土地において水生植物の栽培が盛んになる要因の一つとして、税の問題もふまえる必要がある。明代の長江下流地域では、山・地・田・蕩（塘）の地目に分けて、各々繁雜な税科が課されていた。課

税負擔額がもつとも重いのは水稻田で、蕩のそれは田よりも軽かった。森正夫は明末の蘇州府吳縣において萬曆一七一年に作成された『經賦冊』所載「田糧斗則」の分析を行い、そこに記載される「實在官民田地山蕩」七一四一頃二九餘畝の土地が税糧徵稅率（田糧斗則）に應じて二二種の地目に區分されていることを指摘する。そのうち「地・山・蕩など、正常な稻穀產出量をもたないと認められ、従つてその殆どが輕微な徵收率を課せられている」地目は一八種に及んでいる。³⁹蕩で栽培されるハス・オニバス・ヒシなどに對する稅率も、この輕微な一八種の中に入つていたと考えられる。同様の狀況は、『補農書』の著者・張履祥が、甲申（二六四四年）以後に、太湖南岸の湖州歸安縣の狀況について述べた以下の記載からも窺うことができる。

湖州は稅額不均の府なり、歸安は甚しきを爲す。歸安の田爲る者は卑下にして、歲ごとに水に患い、十年の耕、五年の穫を得ず、而して稅は最も重し。其の地の桑蠶の息は既に田に倍す、又た歲ごとに登り稅は次いで輕し。其の蕩の上なる者は種魚、次者は菱芰の屬、利は猶ほ田を愈ゆるも、而るに稅は益す輕し……是を以て豪民蕩と地を占し、弱民田を墾し其の勢は已に支うること能わず。甚しき者、奸民は田を以て地と爲し山と爲し蕩と爲し、而して重を逃れ輕きを得、愚民は地を以て山を以て蕩を以て田と爲し、而して輕きを失い重きを得（張履祥「書改田碑後甲申後」『楊園先生全集』卷二十一）。

稻田に對する重稅は、負擔の低い蕩を利用し利益を得ようとする動きを生み出すことになつていた。なかでも張履祥が「奸民」と批判する豪民たちは、蕩での養魚や菱栽培を大規模に展開している。一方、過酷な稻作を強いられた「愚民」たちは、日常の食糧確保のために閒隙地を利用したささやかな水生植物栽培を行つていたと考えられる。『補農書』は一九段において「嘗て賦役の重困を論ずるに、基址、墳墓、各の宜しく糧の出づる所と思ふべし」と、重稅の下、日常生活を支えるための食糧獲得の工夫をしておくべきだと指摘する。ここには水生植物についての言及は見られないが、水害の影響を受けず、また重稅からも逃れることが出来る水生作物の栽培は、低平地に暮らす人々によつて意識的に行われて

いたはずである⁽⁴⁰⁾。

(3) 食糧としての役割

以上、野生の水生植物を採取・利用する段階から、栽培化が進み、やがて商業的な植物として栽培が擴大する状況を概観した。史料からは、水生植物が時代を経るにつれて、商業的栽培への一途を辿ったことが明らかになる。前述したように商業的栽培が行われる場合、その主たる消費者は都市部の住人であり、水生植物は副菜として利用される側面が強くなる。萬曆『杭州府志』に澤果・澤蔬の分類が登場するのはこのことを象徴する。一方で、農村に暮らす人々にとつては、水生植物は歴史を通じて重要な食糧であった。長江下流における主要穀物は、稻である。稻の栽培に適した環境を創出すべく、大小様々な水利事業が營まれ、また稻の生産増加のために農業技術の改良が行われた。宋代の長江下流域は、實態はともかく「蘇湖熟すれば天下足る」、すなわち蘇州・湖州で豊作ならば、天下の食糧がまかなえるという俗諺が生まれるほど、稻作地帯として發展し豊かなイメージが印象づけられることになった。しかし、この地域の下層農民の食にとつて稻が確乎たる主穀の地位を占めていたかどうかは疑問である。その理由の一は、低濕環境の人爲的な營みによる克服は、困難を極めたからである。大澤正昭は、唐代の陸龜蒙の甫里の事例を挙げ、デルタには雨後に水没するような不安定な農地が存在し、宋代にいたつてもこの状況を脱するには至っておらず、先進的農業は河谷盆地にあつた點を指摘した⁽⁴¹⁾。圍田圩田の生産の不安定さを克服すべく、明代には分圩が進展し、水利技術は到達點に達することになる。しかし、それでもなお低濕地に暮らす人々は水害とは無關係ではなかつた。水利技術の進歩により排水整備がなされても、雨期に平野部に降る大雨は容赦なく水稻田を水没させた。前述の張履祥「書改田碑後」では、湖州・歸安の田は土地が低いために、毎年水害に苦しみ「十年の耕、五年の穫を得ず」と述べていた。『補農書』第二十段では、

水利を講ぜざる自り、湖州の低郷、稔は淹に勝らず。數十年來、田に於いては甚しくは盡力せず。稼を害するに至る

と雖も、情の迫切せざる者、利、畜魚に在れば也。

と述べ、頻繁に發生していた大水により稲の收穫が大幅に減少していたこと、湖州の低郷では、稲作よりも養魚に重きを置いていたため、水害による大打撃を被るには至っていないと述べられている。

このような環境のもと、太湖の沿岸部ではヒシが重要な食糧として位置づけられてきた。嘉泰『吳興志』卷五、湖・歸安縣に「菱湖は歸安縣の東南四十五里に在り……其の地、菱を産し、居人は采りて之を焙乾し、以て凶年に備う。菱米と號す」とあり、湖州の菱湖においてヒシが「菱米」と呼ばれ救荒作物として重視されていたと記している。また、明・田藝衡の隨筆『留青日札』は、その記載内容が太湖周邊に暮らす庶民の日常生活にまで及んだことで知られるが、卷二二六、菱飯芋羹には民の食について次のように記される。

菱、今の吳人、四角を菱と曰い兩角を芰と曰う。……(芋に)水・旱二種有り。吾が郷は菱・芋を以て兩熟と爲し、一物熟さざるも亦た一荒と稱す。

ここでは、田藝衡の故郷である杭州府錢塘縣の状況が述べられている。郷人はサトイモとヒシが兩方とも收穫できることを「兩熟」、一方しか收穫できないと「一荒」と呼び、二種の作物の收穫を氣にかけていた。サトイモやヒシが民にとつて不可欠な食糧であり、「菱飯芋羹」の標題のままに、日々の食事となっていたことを窺わせる。

往々にして農書や本草書には、水生植物の備荒作物・救荒作物としての有用性が強調される。例えば、『要術』卷六、養魚には、「(菱)多く種うれば、儉歲此れに資し、荒年を度るに足る」とあり、備荒作物としての栽培が奨励される。その後の農書や本草書においても、デンプンを多く含む水生植物については災害時に活用できる點が強調して記される。しかし、水生植物を食糧難の時だけに用いる救荒作物であったと結論づけてはいけない。救荒食・備荒という食物のとらえ方については、書物の編纂者の立場と、農民たちの立場に違いがあることを意識する必要がある。その象徴的な事例を李時珍『本草綱目』に見いだすことができる。『本草綱目』では、「野人」「澤農」などの語を使い、低濕地に暮らす農民とヒ

シヤオニバスなどの水生植物との関係性について言及されている。

(菱) 野人暴干す、剥米(『刻んだ實』は飯と爲し粥と爲し、餅と爲し果と爲す。皆な糧に代うべし。其の莖も亦た暴して收め、米に和ませて飯と作し、以て荒歉を度るべし。蓋し澤農に有利の物なり。

深秋老する時、澤農は廣く收め、爛なるは芟子を取り、藏して困石に至り、以つて歉荒に備う。

(以上、『本草綱目』果部卷三三)

『本草綱目』では、ヒシヤオニバスは各々、荒歉に備えるために有益だと括られているが、これは編纂者の李時珍の見解である。上記の記載では、むしろ野人や澤農がヒシヤオニバスの實を收穫・保存し、様々な方法で食用している事に注目すべきである。水邊に暮らす農民たちにとって、水生植物は饑饉の際に利用するのは無論のこと、日常においても食生活を支える多様な食糧の一つであったと考えるべきだろう。

おわりに

以上、農書・本草書・地方志等の史料に記載される水生植物を列挙し、時代毎の役割の變化を概観した。本稿で確認した點は以下の通りである。

① 長江下流低濕地では、新石器時代より湖沼に自生する水生植物(ヒシ・オニバス・ハスなど)が重要な食糧資源として利用されていた。水生植物は唐代以降に栽培化が進み、宋元時代には商品として栽培が普及し、明代になると商業的農業の進展にともない集約的栽培が行われるようになった。

② 水生植物の利用と栽培の變化は、長江下流域の水利開發の進展と密接に結びついている。宋代以降、圍田圩田による低濕地開發が進む一方、開發の手が及ばなかった蕩(窪地)や排水不良の水田などを活用した水生植物の栽培が行われるようになった。

③ 都市住民を消費対象とする大規模な商業的栽培が進む一方、水生植物は、災害多発、商業化、租税負擔の増加等の様々な社會狀況下において食米を補う食糧として利用されてきた。長江下流低濕地に暮らす農民は、稻を主要穀物として栽培しながら、低濕空間において水生植物の栽培を行い食糧として日常的に利用し続けたのである。

主要穀物が不足した場合に備えてどのような対策をとっておくか、何を食糧として選擇するのか、歴史の中で人間が向き合い続ける問題である。本稿でとりあげた低濕空間における水生植物の利用のあり方は、長江下流低濕地という環境における水利開發と農業の進展、とくに稻の役割を見直す上で一つの材料を提供しうるのである。

註

- (1) 生嶋功『水界植物群落の物質生産Ⅰ——水生植物——』(共立出版、一九七二年)、大瀧末男・石戸忠『日本水生植物圖鑑』(北隆館、一九八〇年)。
- (2) 北田英人「唐代江南の自然環境と開發」(『シリーズ世界史への問い・歴史における自然』岩波書店、一九八九年)。
- (3) 周晴『從沼澤到桑田——唐代以來湖州平原環境變遷研究』花木蘭文化出版社、二〇一六年。
- (4) 中村愼一(編)『浙江省餘姚田螺山遺跡の學際的總合研究』(平成一八〜二二年度科學研究費補助金(基盤研究A)研究成果報告書)。
- (5) 潘艷『人類生態視野中的長江下游農業起源』(上海辭書出版社、二〇一七年、二六八〜二七六頁)。また、田螺山出土の植物遺存體に依據した先驅的研究はDorian Q. Fuller, Ling Qin, Yunfei Zheng, Zhiyun Zhao, Xugao Chen, Leo Aoi Hosoya, Guoping Sun, "The Domestication Process and Domestication Rate in Rice: Spikelet Bases from the Lower Yangtze" *Science* 323(5921): 1607-10, 2009 Mar 20.
- (6) 「火耕水耨」をめぐっては様々な理解があるものの、「粗放な稻作」という点では共通した理解がなされている。なお、火耕水耨をめぐる諸説については、福井捷朗「火耕水耨の議論によせて——ひとつの農學的見解」(『農耕の技術』第三號、一九八〇年。のち農耕文化研究振興會編『農耕空間の多用と選擇——農耕の世界、その技術と文化Ⅰ』大明堂、一九九五年所收)に詳しい。

- (7) オオクログワイ (*Eleocharis tuberosa*) はカヤツリグサ科の多年草で、シログワイ (*Eleocharis dulcis*) の栽培種を指す。漢字では荸薺・鳧茨・烏芋・地栗・馬蹄と表記され、俗にクログワイと呼ばれることが多い。なおオモダカ科のクワイ (*Sagittaria trifolia*) とは種類が異なる。
- (8) 趙有爲主編『中國水生蔬菜』(中國農業出版社、一九九九年)は、蔬菜として食用する水生植物として一二種類(蓮藕・菱・茨實・慈姑・荸薺・茭白・水芋・水芹・蕪菜・蒲菜・水蘿・豆瓣)をあげる。
- (9) 『陶朱公養魚經(法)』は春秋・越の范蠡に假託し魚池での鯉の繁殖・蓄財法について述べた書で、王毓瑚『中國農學書錄』(中華書局、一九六四年)は前漢には成立してゐたとする。
- (10) 大澤正昭『山居録』の史料の活用について(『唐宋變革研究通訊』第六輯、二〇一五年)は、北宋元代に成立した『山居録』(八世紀前半頃『山居要術』の改訂版)の農業史料としての有効性を分析、検討例の一つにハスの記載をとりあげる。そして、『齊民要術』の種蓮法の部分が『山居録』からの追記事であった可能性を指摘する。
- (11) この他、卷十、五穀・果蔬・菜茹非中國物産者・蔣に『食經』云、藏菰法、好擇之、以蟹眼湯煮之、鹽薄灑、抑著燥器中、密塗、稍用」とある。
- (12) 篠田統『菰と粟麥と麻と——忘れられた穀物——』(『生活文化研究』第五冊、一九五六年)のち『中國食物史の研究』(八坂書房、一九七八年所収)は、古代に南國の
- 美饌として食用されたマコモの實が、唐宋まで下ると位置が低下し「貧乏くさくなっている」と述べる。澁澤尙「菰」の本草學・陸游詩所詠菰草考序説(『福島大學研究年報』創刊號、二〇〇五年)は、マコモから實と莖(マコモダケ)の兩者を取ることが出来ない點を指摘、マコモの實の食用が衰退する背景に、宋末元初のマコモダケ栽培の展開があったと指摘する。
- (13) 『陸機語王武子、武子前置數斛羊酪、指以示陸曰、卿江東何以敵此。陸云、有千里蕪蕒、但未下鹽豉耳。』(世說新語「言語」)。この他、西晉・張翰が秋風に吳中の「菰菜・蕪蕒・鱸魚膾」を懐かしんだ故事も廣く知られていた(『晉書』卷九二、文苑傳)。
- (14) 關尾史郎『六朝期江南の社會』(『歷史學研究』五二三號、一九八三年)は、江南の下層民にとって、陂に産する豊かな水産物の採取は、膠田という不安定な農業を補完すべき役割を果たしていたが、そのような日常的用益活動は、豪族による陂湖の獨占によって阻碍されつつあったと述べる。宋・大明年間(四五七―四六五年)に出された五條の制は、一般民であっても山澤を私的に占有できる意味合いをもち、江淮地域における山澤問題の特質を解決する役目を擔っていたと指摘する。
- (15) 古川末喜『杜甫農業詩研究』(知泉書館、二〇〇八年、三七四頁)。後世の事になるが、南宋の陸游『劍南詩稿』には菰が食材として多く登場する。陸游の詩と菰との關係を詳細に論じた澁澤尙「陸游と菰——放翁詩作をめぐる

本草學的考察——」〔『學林』四六・四七號、二〇〇八年〕は、山陰（紹興）の鑑湖畔で生涯の大半を過ごした陸游は、野生の菰（穀實や莖）を日常食として賞味していたと指摘する。また、中林廣一「宋代農業史再考——南宋期の華中地域における畑作を中心として——」〔『東洋學報』九三卷一號、二〇一一年。のち『中國日常食史の研究』汲古書院、二〇一二年、第二章所收〕も同様に、陸游が紹興近郊農村の民の生活苦を詠んだ「貧居」（得飯多菰米、烹蔬半藥苗）などを例に挙げ、農村部では宋代、コメ以外のものを混ぜてコメの不足を補う「かて飯」が日常食であったとする。

- (16) 大澤正昭「唐代の蔬菜栽培と經營」〔『東洋史研究』四二卷四號、一九八四年。のち『唐宋變革期農業社會史研究』汲古書院、一九九六年所收〕は、唐代における蔬菜の栽培品種の増加が、小農民による零細な菜園經營に利益をもたらし、蔬菜栽培は近郊農業として飛躍を遂げた」と指摘する。
- (17) 北田英人「一〇〜一四世紀中國の社會と自然についての人類史的考察——白菜・油菜・橘栽培と意識性・自然性——」〔『宋元時代史の基本問題』汲古書院、一九九六年〕、拙稿「文獻史料からさぐる植物と人の關係史——中國・長江下流におけるヒシ利用の歴史」（庄田慎久編著・譯『アフロユーラシアの考古植物學』同成社、二〇一九年）。
- (18) 澁澤尙註（12）（15）前掲論文。
- (19) 南宋・溫革により紹興年間（一一三一〜一一六二年）に編纂された『分門瑣碎錄』は明清期に散佚したが、一九六〇年代に上海圖書館でその一部の抄本が発見され、「麥首」についても記載があった。なお、『永樂大典』卷二二一九四所引「種藝必用」にも同文が見られるが、『瑣碎錄』を引用したものである。『瑣碎錄』の成立については化振紅「分門瑣碎錄校注」（巴蜀書社、二〇〇九年）附錄二「分門瑣碎錄」農業詞語擴散的層位性」を参照。なお、「根逐年移動」の解釋について、澁澤尙（12）前掲論文は、菰草の聯作は品質を低下させることが知られており、これは高品質な白色のマコモダケを保持するための人工栽培の記録であると指摘する。
- (20) 四庫全書本『竹嶼山房雜部』所收「宋氏樹畜部」は、「其臺く甘嫩」を割註とする。なお『分門瑣碎錄』のこの箇所は、上海圖書館藏明抄本、『樹藝篇』所引にも見當たらない。
- (21) 『北夢瑣言』卷十、杜孺休種青蓮花「杜給事孺休典湖州、有染戶家池生青蓮花……染工曰、我家有三世治靛瓮、常以蓮子浸於瓮底、俟經歲年、然後種之」。
- (22) 佐藤武敏『中國の花譜』平凡社、一九九七年。
- (23) 斯波義信『宋代商業史研究』（風間書房、一九六八年、一九七頁）は、宋代における都市、手工業の發達に伴い、都市人口の副食品や手工業の加工原料たる蔬菜に對する需要が高まり、都市近傍には蔬菜栽培が發達したと指摘する。
- (24) 小野寺郁夫「宋代における波湖の利——越州・明州・杭州を中心として」（『金澤大學法文學部論集・哲學史學篇』一一卷、一九六四年）、長瀬守「宋代江南における水

- 利開發」(『青山博士古稀紀念宋代史論叢』(省心書房、一九七四年。のち『宋元水利史研究』國書刊行會、一九八三年所收) 參照。
- (25) 小野寺註(24) 前掲論文。
- (26) 王毓瑚『中國農業書錄』(中華書局、一九六四年初版、二〇〇六年修訂版) は、本書は最初に付刻したのが鄺璠であつたに過ぎず、多くの日用類書がそうであるように、實際には複数の人の手により編纂されたとする。また天野元之助『中國農業史研究』(龍溪舎、一九六二年) は、本書が刊行された弘治一五年に鄺璠は徽州府の知縣であつたことから、鄺璠を刊刻者とすることに疑問を呈する。
- (27) 拙稿「環境史から見る農業と開發——明末清初の江南における水芋と甘薯の栽培事例から——」(大澤正昭・中林廣一編『春耕のとき——中國農業史研究からの出發——』汲古書院、二〇一五年)。
- (28) 張履祥『補農書』は順治一五年(二六五八)に初版が刊行された。明末に湖州漣川の沈氏が記した『沈氏農書』を補足する目的で執筆され、『沈氏』には見られない作物を多く収録する。水芋もそのような作物の一つである。湖州における水芋栽培の導入時期を『補農書』の記載から窺うことはできないが、分圩の動きが関わっている可能性も考えておきたい。なお、本稿での『補農書』の引用は、同治十年刊『楊園先生全集』所収に依つた。また校勘や譯注は、大澤正昭・村上陽子・大川裕子・酒井駿多『補農書』(含沈氏農書) 試釋——現地調査を踏まえて——(一〇三三)
- (29) 陳・顧野王『輿地志』(『太平御覽』一七〇所引)「華亭谷出佳魚蓴菜」。嘉泰『會稽志』卷一七、草部「蕭山湘湖之蓴、特珍柔滑而腴。方春小舟采蓴者滿湖中。山陰故多蓴、然莫及湘湖者」。
- (30) 陳橋驛「歷史時期紹興地區聚落的形成與發展」(『地理學報』一期、一九八〇年)、斯波義信『宋代江南經濟史の研究』(東京大學東洋文化研究所、一九八八年。訂正版汲古書院、二〇〇一年)。
- (31) 後世の狀況になるが、宋・曾鞏『元豐類稿』卷一九、廣德湖記によれば廣德湖には「湖之產有鳧雁魚鱉、菱蒲葭莢、葵蓴蓮芡之饒」があつたという。
- (32) 吳の都尉・嚴密による甬里塘の建設をめぐることは、『三國志』卷六四、吳書一九、濮陽興傳を參照。草野靖「唐末時代に於ける農田の存在形態——古田と新田——」(上)『法文論叢・文科篇』三一號、一九七二年) は、湖田とは水邊に開かれた田で圩岸のような圍を持たず水位の上下に直接影響される耕地であり、唐代にあつては、山麓・山間部の古田に對置される水邊の新田であつたと述べる。
- (33) 本文(2)でも述べたが、「澤果・澤蔬」の呼稱は萬曆「杭州府志」卷三二、土産に見える。
- (34) このような二つの方向性が存在することは、大澤正昭註(16) 前掲論文が「陳粵農書」に見られる蔬菜栽培を例に指摘している。また、註(27) 前掲拙稿において水芋の場

合にも二つの側面があったことを論じた。

(35) 『宋會要輯稿』食貨六一、水利下・淳熙十一年には、「與
 江湖相貫」として一二の蕩の名を列擧する。なお太湖東岸
 の江湖・澱山湖地區の圍田問題については、西岡弘晃「中
 國における農村工業生成の基礎構造——宋代澱山湖圍田
 の問題をめぐって」(『中村學園研究紀要』七號、一九七四
 年、のち『中國近世の都市と水利』中國書店、二〇〇四年
 所收)に詳しい。

(36) 『方輿彙編・職方典』卷六五五、江寧府郡・高淳縣志
 「相國圩、内田四萬八千畝、週四十里。……扁埂、在相國
 圩南、本圩形勢東南高阜、西北窪、因築上下壩以禦水。
 ……鍋底蕩、在縣西三十里相國圩。因築上壩・扁埂、水壅
 於此。形如鍋底。其中田皆低潦」。

(37) 渡部忠世・櫻井由躬雄『中國江南の稻作文化——その
 學際的研究——』日本放送出版協會、一九八四年)第二章
 「宋・元時代の圍田圩田をめぐって」(一一一頁)のま
 とめにおいて、櫻井由躬雄は萬春圩の事例を擧げて、宋代
 の成立時點において圩内には水生植物や濕地に強い植物か
 ら得られる利益があったことを指摘し、「記録には現れな
 い廣大な低濕地・沼澤地が圩内にあったことを推測せしめ
 ます」と述べる。

(38) 濱島敦俊『明代江南農村社會の研究』(東京大學出版會、
 一九八二年)、「江南デルタ圩田水利雜考——國家と地域
 ——」(愛知大學現代中國學會編『中國21』三七卷(特集
 中國水利史)、二〇一二年)。

(39) 森正夫「十六世紀太湖周邊地帯における官田制度の改革
 (上)」(『東洋史研究』二二卷、四號、一九六三年。のち
 『明代江南土地制度の研究』同朋舎出版、一九八八年所收)。
 (40) 『沈氏農書』では、水生植物の栽培といえは逐月事宜
 (三月と十月)に「菱」の栽培を確認できるのみである。
 また『沈氏農書』を補足する『補農書』にも第一七段、上
 種蔬一種に「茨姑便於溝際」クワイは溝の際に植えるのが
 よい」、また前述の第二三段に水田における水芋栽培が記
 載される程度である。水害多發地域でありながらも、水生
 植物の記載が少ないのは、低地の有効利用が養魚に傾いて
 いたからであろう。

(41) 大澤正昭「蘇湖熟天下足——「虚像」と「實像」の
 あいだ——」(『新しい歴史學のために』一七九號、一九
 八五年。のち『唐宋變革期農業社會史研究』汲古書院所
 收)。

while the rotating system gradually died out. It can be inferred that the shortage of officials, especially in the newly occupied areas during the period of unification, was one of the factors that contributed to this change in the *Zuoshi*. Based on the above arguments, this paper has presented new insights into the external factors that led to the bureaucratic transformation from the Qin dynasty of Warring States period to the early Han dynasty.

UTILIZATION AND CULTIVATION OF AQUATIC PLANTS IN THE LOWER YANGTZE RIVER REGION IN CHINA

OKAWA Yuko

This paper focuses on aquatic plants in the Lower Yangtze River region and analyzes the changes in their utilization and cultivation based on books of agronomy, materia medica, and local gazetteers in an effort to investigate new aspects of developmental history of the Lower Yangtze River region.

Analysis of plant remains from the Neolithic Tianluoshan 田螺山 site in Yuyao, Zhejiang province indicates that aquatic plants, such as water chestnuts (菱) and gordon euryale (芡), were important components of the diets of waterside residents from the Neolithic Age onward. It can be surmised from the *Huozhi Liezhuan* 貨殖列傳 of the *Shiji* 史記 that food strategies were chosen based on various aquatic resources in addition to rice in south China in the Former Han era. The 6th century agronomy book, *Qimin yaoshu* 齊民要術, recorded five types of aquatic plants as byproducts from fish ponds, and later books on agronomy state that they came to be cultivated independently and that the variety of these plants also increased.

Full-fledged cultivation of aquatic plants in the Lower Yangtze River region occurred after the Tang era. During the Song and Yuan eras, the varieties of water chestnuts and gordon euryale increased, and water bamboo (茭白) became popular as a food source, while the lotus was also cultivated for its blossoms. It is therefore clear that aquatic plants became commercial crops, which resulted in the large-scale cultivation of aquatic vegetables bringing with it new problems due to decreases in lake surface area and lack of water supply. In the Ming era, the development of commercial farming was accompanied by intensive farming, which required increased labor and expenditures for such activities as transplanting, applying fertilizer, and weeding. The cultivation of Chinese arrowhead (慈姑), Chinese water chestnut (荸薺), and water taro (水芋) also appeared at this time.

These changes in the cultivation of aquatic plants were closely associated with the development of irrigation and drainage projects. From the Song era onward, low-lying land was cultivated by diked enclosures (*weitian* 圍田) or polders (*yutian* 圩田), while aquatic plants were cultivated in underdeveloped sunken areas (*dang* 蕩). Aquatic plants have been important resources for waterside peasants in China, and were useful in relieving the effects of grain (稻) shortages that occurred for various reasons.

**FROM “THE AGE OF THE SA SKYA PA” TO “THE AGE
OF THE PHAG MO GRU PA” :
CONSIDERING CHANGES IN THEIR DESCRIPTION
IN TIBETAN WRITTEN SOURCES**

YAMAMOTO Meishi

The historical consensus is that the 13th–14th century, the age of Mongol hegemony in Tibet and most of Eurasia, was the period of transition from the *Sa skya pa* to the *Phag mo gru pa*. However, how was this perception formed among Tibetans? This paper aims to clarify the evolution of Tibetan perception of the *Sa skya pa* period and the *Phag mo gru pa* period by comparing Tibetan historical sources composed in the 14th century with those written from the 15th century onward.

First, the sources composed in the 14th century agree on the view that 'Phags pa and Phyag na rdo rje, of the 'Khon family, and the *dpon chen*, who controlled the secular affairs of the *Sa skya pa*, held sway while maintaining a relationship with the Mongols. And Byang chub rgyal mtshan, who also lived in the 14th century, recognized that the *Sa skya pa* had extended its control of “*bod kyi chol kha gsum*” (three *chol kha*, districts of Tibet), but that its hegemony gradually declined.

Secondly, *Rgya bod yig tshang*, written in the 15th century, created the new phrase “Qubilai presented 'Phags pa with the *dbus gtsang gi khri bskor bcu gsum*” (the thirteen myriarchies of central Tibet), and this source ignored the hegemony of the *Phag mo gru pa*, because the composer of this source belonged to the *Sa skya pa* school. However, *Deb ther sngon po*, which was also written in the 15th century, chose the phrase “Qubilai presented 'Phags pa with the “*bod chol kha gsum*,” so the compiler of this source did not adopt the position of *Rgya bod yig tshang*, and its attitude was close to that of Byang chub rgyal mtshan. This source also argues that the times had changed from the age of *Sa skya pa* to that of the 'Phag mo gru pa,